

令和6年 二十歳を祝う会

「ありがとう」という言葉を大切に



今野 大河さん

本日は、二十歳という大事な節目を迎えるにあたり、このような盛大な式典を開催して頂き、誠にありがとうございます。こうしてまた、皆さんにお会いできて、とても嬉しく思います。

また、ご来賓の皆様には、ご多忙なところ、ご臨席を賜るとともにお祝いや激励の言葉をいただきました事を、代表して心より御礼申し上げます。

私たちが、生まれ育ったこの大好きな大河原町で二十歳を迎え、大きく成長する事ができたのも、熱心なご指導をしてくださった先生方、小

さな頃から見守ってくださった地域の皆様、共に大河原町で成長した仲間たち、沢山の愛情を注ぎ、大切に育ててくれた家族がいたからです。私たちを見守ってください、本当にありがとうございます。私たちが、これからも明るい未来へ向かって進んでいくとともに、お世話になった方々に恩返しができるよう努めて参りますので、これからもあたたかく見守って頂ければ幸いです。

改めて今年、二十歳という節目を迎えた私たちですが、皆さんはどのような二十歳を歩んできたでしょうか、また、歩んでいるのでしょうか。就職し、社会に出て活躍している人、夢に向かって学校で勉強に励んでいる人などそれぞれだと思えます。また、過去を振り返ってみると、友人と共に過ごした楽しい日々も、励ましいながら受験勉強を頑張った日々も、汗を流し、時にはぶつかる事もあった部活動も、私にとってはかけがえのない思い出です。しかし、私たちの学生時代は、華やかな思い出だけではありま

せんでした。それは、皆さんの記憶にも新しい新型コロナウイルスの世界的大流行です。新型コロナウイルスが5類に移行したことに伴い、様々な制限が解除されたのも、昨年のものであり、こうしてマスクを外して集まる事さえできませんでした。皆さんが過ごした学生時代も、満足に部活動ができなかったり、修学旅行に行けなかったり様々な制限があり、当たり前前の学生生活とはかけ離れた学生時代を送ったことだと思えます。コロナ禍を経験した私たちですが、その中で、私は考えるようになった事が一つあります。それは、私たちが過ごす日常は、決して当たり前ではないという事です。通っていた学校も、部活動も友人との集まりも、コロナ禍前と同じようにできなくなってしまう時、私は、これまでの何気ない日常に幸せを感じる事ができるようになりました。それと同時に、当たり前前に日常生活を送れる事に感謝するようになりました。そして私は今、大切に行っている言葉の一つがあります。それは、「あり

がとう」という皆さんが当たり前前に使っている言葉です。コロナ禍を経験していなければ、この「ありがとう」という言葉一つにこんなにも重みがあると感ずることが出来なかったかもしれないし、感謝について深く考える事もなかったかもしれません。改めて今、二十歳を迎えられたことは、決して当たり前のことではなく、周りの支えがあったからこそだと心の底から思っています。私はこれからも感謝を忘れず「ありがとう」というこの言葉を大切に、これからの人生を歩んでいきたいと思っています。皆さんもこの言葉の意味をもう一度考えて「ありがとう」という言葉を感謝している相手に伝えてみてください。

最後になりましたが、今まで私たちを支えてくださいました皆様には、どうか今後ともあたたかい目でご指導ご鞭撻をいただきますようお願い申し上げます。

そして、本日も集まりいただきました皆様の一層のご健勝と大河原町の限らない発展をお祈り申し上げます。代表の挨拶とさせていただきます。

本日は、私たちのためにこのような素晴らしい式典を開催していただき、誠にありがとうございます。また、ご来賓の皆様には、ご多忙のところご臨席を賜るとともに、皆さまからのお祝いや激励の言葉をいただきましたこと代表して心より御礼申し上げます。

今日まで私たちと関わり合い、私たちが育て、励まし、ご指導いただきました家族や先生方、地域の皆様、本日私たちが無事二十歳を祝う会という一つの節目を迎えたことをご報告するとともに、感謝の気持ちを私たち一同、今、改めて、強く感じています。

二十歳を祝う会を迎えた今日、かつて同じ学び舎で共に過ごした仲間と久しぶりに再会し、小中学校の



佐藤 夢依音さん

将来の目標に向かって日々学び続けたい

頃の思い出を振り返りながら、あの頃、思い描いていた二十歳になっていくか正直わかりませんが、こうして生まれ育った大河原町で式典を迎えることができたこと、大変嬉しく思います。私達は、二十歳という大きな通過点を無事の迎えることができました。私たちの中には学生として勉強に励んでいる人もいれば、既に社会に出て働いている人も、将来について模索している人も、立場は様々ですが、一同、社会の一員としての自覚と責任を持ち、精進していきたいと思えます。

私は将来、医療関係の職に就きたいと思ひ、大学で学業に励んでいます。医療の仕事に就きたい理由は、人々の健康と幸福に寄与したいと思ったからです。健康は個人や社会全体の基盤であり、その向上に貢献することができる仕事に魅力を感じました。医療を通じて、人の人生に対する有益な影響を与えることができると信じ、これからも日々学び続けていきたいです。

この二十年間、たくさんの方に出会い、様々な経験をしてきました。嬉しいことや楽しいこと、辛いことなどたくさんあったと思います。これから先、未来は不確かであり、時には試練に直面することもある

かもしれない。しかし、その中には成長と学びが隠れていると思います。失敗や困難に直面した時は、立ち向かって頑張っていきたいと思っています。

最後になりましたが、これまで大切に育ててくれた家族やご指導いただいた先生方、近くで見守って下さった地域の方々、沢山の人が支えられて、この日を迎えることができました。

今日という日を胸に刻み、感謝の気持ち忘れず、大人として自覚ある行動に努めていきたいと思えます。まだまだ未熟者の私たちに、より一層のご指導ご鞭撻をよろしくお願いいたします。

1月7日、えびさホールで「令和6年二十歳を祝う会」が挙行政されました。

能登半島地震の犠牲者への黙とうから始まった今年の式典は、終始厳粛な雰囲気の中、参加者全員が成人としての意識をさらに高め、社会を築き背負っていく節目であることを確認し合うものとなりました。

そして、その決意を代表の2名が「二十歳に思う」と題して発表しました。

